

人の命

第四年級 河村喜一郎

月影さよくてらすとも、
花香しく薰ゆるものも、
さば人の世に生れきて、
ゆふべうま酒よびし子の、
見よや淋しき野べ送り、

あだしむら雲いかにせん、
すさむ嵐に散るものを、
死ぬてふことのあからめや、
けさは白衣につゝまれぬ、
送る其身の明日いかに。

磯邊の思

第三年級 清水省三

琵琶の響か琴の音か、
天女の撥に松かせの、
あゝ人の世の汚れたる、
さゝ波きよき磯の邊に、
浪のしぶきを背にあひて、

あに語らまく汝はそも、
あはれ狂へるうつゝ世の、
清けき波をいましめて、
奏づる曲や何あらん。
つらき叫びにあきはてゝ、
獨り自然にうそぶかむ。
渚飛び交ふはまちどり、
眞砂の岸をさはあくぞ。
けがれをこゝに移さじと、
終日いそをあくといふ。

沖遙かあるしまあげや、
浮世の外の世あるかと、
よしや問ふごも人の身は、
洗ふにかたき世の海に、
磯あれ松やはまちどり、
語るに易きわが友と、

うすれ漂ふあやぐもに、
あゝよしされど吾問はじ。
けがれをつゝむ肉の、
千鳥の笑をいかにせむ。
浮世の外のこれや世の、
とひ來しことの愚かさよ。

※　＊　＊　＊　＊
鳥のあく音にこゝろあり、
ひとり渚にたゞすみて、

浪のひゞきに思ひあり、
立去りかねし夕かあ。

和歌
六花集

第五年級 松居源四郎

一しきり村雨すぎてひむがしの入江のああた虹あらはれぬ
色づきし南天の實を朝ごとについばむ鳥の聲あつかしき
水車まわる山邊に一むらの白桃咲きて鶴のふく
流泉の琵琶の音すみて岡の上の松の梢にかかる月哉
ゆふ月夜霧たちさへて里川に鍬洗ふ人の影おぼろあり

わが宿は山を後に河を前に梅もかをれり月もさやけし
あゝ色の天のきざはしかゞけりその橋のうへ神や渡らむ

歌 反 古

第四年級 野 村 義 雄

一聲はひこゑよりも哀れありさむくある世をかこつすゞむし（鈴蟲）
をみあへし露のひかりを水かゞみうつして巳が影たのむらし（女郎花）
古寺の裏手の卒塔婆かくるまで木の葉ちるありあきの夕ぐれ（古寺落葉）
ふる寺の鐘のひゞきと諸共に山風さむくちる木の葉か（同上）
もみぢ葉のまだ散り果てぬ梢にもけさはつ雪の花をみるか（初雪）
君か代の千代をしらぶる松風はうれしき琴の音にかよふらん（松有歎聲）
もみぢ葉は志賀の嵐に散り果てゝ通ふ舟あきふゆは來にけり（湖邊初冬）
只ひとりふみよみをればちら／＼風あき窓にうめの花ちる（あるさき）
来て見ればきよしにまさる佐和山の筆も及ばぬあがめある哉（於佐和山）
ふりしきる雪をしのぎて城山に雪のたゞかひ今ぞたけあは（城山雪戰）
にほのうみ霞める奥に一すぢの黒きはふねのけむりあるらん（旅中漫吟）

和歌三首

第四年級 河 村 喜 一 郎

さく花の香りや空にみちぬらんかすみわたれる春の夜の月（春夜の月）
笛の音のしらべかすかに聞ゆあり磯山松に月かかるころ（或夜）
月さゆる濱べにひとり佇めばあしふをさしてかりぞあくある（秋夜湖邊）

和歌六首

第四年級 那 須 開 神

わたつみのかざしの花か竹生嶋かげさやかあり雪のあけぼの（湖邊冬景）
桺の木の枯れにしのちは我が袖よ露のふしごゝありにけるか（歎亡友）
咲けばちる花を常ある世にはあれど昨日けふとは思ひかけきや（同）
鶏の聲する方ぞ里あらんあやめもわかず霧たちまよふ（霧）
さよふけて訪ふ人もあき我が庵を叩くは秋の風にぞありける（秋風）
ほめばほめよそしらばそしひ大丈夫の心は山ようごきやはする（失題）

うた六首

第三年級 清 水 省 三

風あらき鳩のはまべにあがれ来てうき世の浪にあらはるゝか（折にふれて）

山の端に日は入りぬれどあほしばし金龜のやまの松にのこれる。（夕暮をよめる）
經のこゑ萬籟絶えて澄みのぼる月かげきよき秋のやまでら。（秋夜山寺を訪ふて）
秋暮れて初霜白き岡のへにさびしくのこるきくのひともと（残菊をよめる）
ほゝゑみもまだはころびす初春のゆく手のぞけき君が代のうめ（新年のうめ）
心をもうつし出づべきすべもがあかたちばかりの人におき世を（寫眞に題して）

和歌三首

第三年級 山本繁七

川ぞひのみどりこめたる柳かげのぞかにめぐる水車の音（青柳）
ゆきくれて野末の小みちたどりゆけば月かげうすく雁あきわたる（秋暮）

小夜更けて月ほの白き庭のおもにしづかにかをるしら梅の花（友を訪ひて）



小品漫録

◎我が理想の人

第五年級 廣瀬勘次郎

予一日新井先生の寓を訪ひ、先生の亡兄健之助君の性行を聽きて大に感する所あり、君が人となりは實に予が理想とする好個の人物あり、師表あり、轉々景暴の念に堪へず、茲に聊か其性行の一斑を叙し、併せて君が在時ものせられし歌文二三を掲げて、學生諸士に示さんとす。

君は實に防州山口の人、父は此地の儒學者にて、家庭の嚴正云ふばかりあかりき、君家にあるこご十數年、一旦身を軍籍に入れて干戈の人となりしが、日あらずして父の計にあひ、業を卒へて再び郷里に歸り、専心嗜む所の文學を研む、才名一郷に噴々たり君、性恬澹にして、名利に馳するを嫌ひ、狷介剛健

にして一種の氣概ありき。されば志を屈して他に從ふを耻ぢ、見識往々人の意表に出づる者ありき。故に特に富貴の子弟を惡みて、之を伍するを屑しとせず、常に閭里の少年を嘲つて、優柔共に語るに足らずといひき、また人と語りて、苟もその言の賤むべきものあるときは、二たびとだにうちとけて語ることあかりければ、その交るところ廣からねど、その識る人は必ず正義の士を失はざりき。その幼時毎に、劍を撃ち馬に跨るあご、勇壯活潑ある事を好みしが、稍やひともあるに及び、いたく文學に思ひ入りて、寢食を忘れにき、また風流閑雅の道にさへ敦くて、その灑洒たる風采言動、一つの摸すべからざる趣味を有したりき。彼常に人に云うて曰く、われ一つの人に勝れる者あらず、只「果さゞれば止まず」といふ意氣あるのみと、かくて郷國に在りて、研鑽年を重ねしが、田舎に潜まり居ては、事のはか行かぬを憤りつゝも常に學資の供給あきと、老母の奉仕を欠くことに沮まれしが、素志躍々としてもだしがたく、

遂に奮ひて、徒手出京し、一身を文學に傾注するに至りぬ。

先考の嚴正は君が心膽研磨に與つて力あらしめしからん、飽食暖衣は學生の禁物あり、されば先考は終に臨んで君に一金を遣さゞりき、今東都に遊ぶと雖家素より豊あらざれば、往々學資の窮乏を感じられしことありと云ふ、亡父の在時恩義を蒙りたる子弟今は都下に門戸を張り、同國出身の先輩數多しと雖君が獨立獨行の特性は他人に屈するを屑しこせずつぶさに辛酸を嘗めて僅に自活の途を開き、朝とあく夕とあく、餘暇あれば圖書館に馳せて刻苦精勵志を所の國學を研鑽せり、其居は三疊の破屋其衣は一着の弊衣、而して其食は蔬菜あり、寒夜着るに蒲團あく、夏宵つるに蚊帳あし、或時は同胞相抱いて暖を取り、或時は眠らずして夜を徹す、時には露店の主人公となり、時には陶器屋の畫工となる、賃金を得たるときは炊烟細くあがり、囊底錢あきときはまた燈火の影を見す。

少しこせず、君の吟聲は又常人の到底學ぶ能はざる所、心氣鬱々の時は頭を搖げて吟するにその聲調恰も、流水の滔々たるが如く、珠玉のまろぶが如く、風に駕し空をゆくものゝ如く、感余りて膚に粟を生ずるばかりありき。

既にして病漸く篤く廿七年七月瞑せり、享年は廿有六、馥郁たる梅花一枝、春風に薰せずして先づ折れたりとや云はん。

快男兒あはれ大志を齎して透きぬ、天若し此好丈夫にかすに春秋を以てせば、後日の大成知るべきのみ惜いがあ多年の苦學一の功あく、切磋の玉將に世に光らんとして土中に埋れぬ。

余先生に乞ひて其遺物を見る隨筆日記の類多し、雄麗の筆路已に一家を成せり、曾て橘千蔭の筆意を學びて見まがふばかりあり又君が在營中の寫真あり、戎衣嚴めしく一劍を腰にして樹下に立つ、威風凜然として眞に古武士の風槩あり。

× × × × × ×

小品漫錄

清廉の士は困して節をかへず、鉄腸の士は窮して益々志を堅うす、諺に曰く武士は食はねど高揚子と、破帽の影に月桂の冠あり、弊衣の裡に錦鏹の盛装あるを知らずや。

君の學業日に進み期圖漸く其緒に就かんとするに及び、病魔は忽焉として此好丈夫の身をおそひ來りぬ初めの程は輕症胃加答兒ありしが、轉じて肺結核となり、又起つ能はざるに至れり、時恰も征清の役國家多事の際、君は豫備軍曹たり、召に應せんこせしも病を以て果さず、遺憾譬へんに物あく、夢は常に遼東の山野を迷ひぬ。

君は激烈多血の士あるに共に優悠情に富み涙にもろき人也されば父母を懷ふの念深く、床中常に故山を望んで老母を養ふ能はざるを悲めり、又時には詩歌によせて懷を述ぶることありき、君は又多藝の人、詩歌音樂繪畫に長じたりき、中にも最も音樂に巧むりき、その病中著す所日本詩吟譜あり、これ君が頭腦より出せし新機軸にして、現今之れを用ふる地方

◎松々記

因に云ふ、こは氏が嘗て長洲萬松院といふ寺に寓して、研學せしことありしを、後出京するに及び、既往の事感慨に堪へず、即ちその有りし事ごも書き集めて、萬松院主に贈りし一節あり、以てその人とありしを見るに足る仍りてここに抄錄す

長門の國山田の邑に靈鷲山といふ山あり、山のあからに靈塲ありて萬松院さんいんといふ、昔この院にやむことあき聖出で玉ひて後は、本山の座主にめしのばされてめでたき大往生をこげ玉ひぬ、本山にも萬松院さんいんといふあり、此處はそれに倣ひてつけられしにやありけむとぞおぼゆる、上人の御弟子に提山和尚だいさんじょうとあむいへるが聖人の舍利をばもてきて間あく此院にあほりにけり、此和尚いわけあかりしより深く佛法に歸依して聖の御弟子のはやくより豊浦の覺苑寺に住まれけるに謁して剃度をとけゝるが、聖人の本

山にのぼり玉ふにつき上りて、やがて人寂を見とげ
まゐらせけるにぞありける。

今は塵外の靈境に住みて紫雲に包まれつゝ結跏趺坐の苦行積みにつみて専ら塵世の無常人間の歎苦をはかあみつゝ朝にはみ谷におりて閑伽をくみ、芝生に坐して花をつみ、夕には薰するかをりこまやかに讀經の聲ぞかすかかる、そかひの山のかひより出づる月かけは、里人も見和尚も見る、見る目は同じけれど見る心は同じからずとぞ云ふある、されば今世のかいあでの僧とはここにて、五つの戒おごそかにかざりもあく慾もあく誠に聖の御弟子と云ひつべくめでたき佛果を得られんこと疑ひあく、行末頼母しこあん物知り人は云ひあへりける、况んや名利につかはれて閑あるいとまあと、一生を苦みに過す非修非學の徒と日を同うして語られんや、いまだみそちにはみたぬよはひあるを、わざのいとまには、からのやまとこの歌の道にさへ思ひ入りて、號は松院とあむ聞えたりける。

たく惡みて、そしりたりけるを、其道を知らずて、
ひたぶるに惡むは由あし、道場にも詣てゝ其道をき
みて、さて兎も角もどさとす人もありけれど、さら
に聞入れさりけり。
さる程に明治廿五年と云ふ年の七月の初めつかた、
暑さに打萎れて、いかで涼しく清げある所もがあと
打わびてありけるを、友ありける某そはよき所にゐて行かむとて、或夜彼の萬松院にて行きけり、住寺の和尚、簞子に端近く迎へ上げて、あるじせらるること、いとねもごろあり、寃の水の音かすかに聞えて、すゞしくひやうかる松風、そよくと袂にかよひて、ほのめきくるかをり、此世のさまとも覺えず、靈鷲の山の月さやかにさし出でゝ向ひの青山勝山おぼろに見ゆ、松園心にあはれがること限あし夜更くるまでありて罷りかへるさ、友の云ひけらくいかに僧は惡きものにて、道場は穢しきものあるぞと云ひければ、松園取あへす
あひ見ての後の心にまかせずて

こゝに新井松園とあるむいふ男ありけり、老たる一人の親を養ひわびて、よきたつき求めにとて、はるゝ此里にまよひ來にけり、此松園其性こちくしく、ともすれば人とあらがひ、心一と向きて、己かよしそ思ひぬることは、何處までもよしと云ひもて貴く、ねちけたるしれものありけり、文學をいたくたしみて、旨と皇國振をあむ學びにける、文もかき、歌も読みけれども、己れのみよしと云ひて、人は一人もよしと云ふ人あらざりけり、されど自らはわろしどは、つゆ云はざりけり、又いたく猛けり罵るをいみて目の前にては兎角云ふ人あかりしかば、いよ／＼心おごりてものしおほに、すましたりけるぞいと傍痛かりける。

常に云ひけるは此道のおくにたどり入らむまではあだしごとは、たえて、見もし聞きもせじ、たゞおもてもふらず、ひたすらに辿らむと云ひぬ、されば世の中の事は、何につけても、すべて知りたらず、うべ一人の親をも養ひわびつるありけり、又佛法をい

かねてつらしど何思ひけむ
明日の夜もこはむと云へば、さもこことて、笑ひつゝかへる。
(以下畧す)

あふ坂山を越ゆとて

あふ坂をうち越え見れば豊浦の海

黒き小島に白帆かくろふ

春故郷にかへるて

春霞たつを見すてゝ行くわれを

花あき里のかりとみるらむ

都にありて万松院の昔をしのびてつかはしける歌十首の中

冬こもり寃の水もよわり行く

夜はのしつくの音のはかあさ

朝あくとろくと打あらす

法のつゝみも今はきこえす

今もかと咲き匂ふらん吾が宿の

池のみきはのむらさきの花

春霞かすみていにしかりあらは

待たれん秋もあらましものを
たちさりし野澤のあとの濁りあは
谷のましみづ掬ひいれてよ
京に上らむとする時人の許につかはしける
春霞たちいてよいあはふるさとの

のこけき人そこひしかるべき

病中あらます事ごも思ひつゝけてよめる

黒烟旅のかたみごめおきて

今はこむかふるさとのそら

萬松院に在りし時、向ひの青山勝山の、並ひ

立てるを見てよめる、青山はいと角だちて、

いとけはしきに、勝山は丸く、やさしげあり

かごくし青山がねど、まろくし

勝山がねといづれ高けむ

△十 二 支

一月十二日雑誌部役員茶話會を杉浦先生寓居に開く
予理事十二名に向て席上十二支を課し各其好むところを以て當籤の題を作らしむ歌あり文あり野趣自ら

我も一節歌はんと、
ごよめる聲をふり立てよ、

静けき野邊に嘯けば、

涙涸れたる世の人の、

かたき胸をも碎く可く、

暫しはやまぬ其の響、

△寅

S か 生

虎よ、虎よ、
楚人汝を呼んで於菟といふ、子默齊の詩に入山射至
幾於菟と、於菟は鳥徒也、汝已れに此名を冠せられ
て耻づるあきか。

汝が得たる「虎」の名は我國史上に淺からぬ因縁の
存するものあり、汝は遠く印度の琅玕の間に生れ、
より幾百年、近來汝が徒我國に來るもの往々有り
と雖も、皆檻せられて、汝が暴戾殘忍を悉にせしめ
す、而かも汝が徒貓兒は能く深閨に坐し、巾幘に侍
して五候の餚に飽くと雖。

掬すべきあるもいまだ掌上に弄すべき珠玉にあらず

さはれ之を通じておぼろげに各自の面影を觀得べき

ものあるが如しもとより座上の一興にして文學の余

事を末枝たること言をまたず諸生のこれに耽らんこと

を恐るべ雖また彼の園碁雜談にまさること遠かるべ

しと信す茲に之を探錄せるは當時のおも影をして來

時の進境に比らべんとてのわざ也。（坂田生記）

△子（鼠一首）

紅 雨 生

ほのぐらき厨のあたり人あきにちさきねづみの洗ひ
米嗜む。

△牛

乾

外

一日の業を野におへて、
主の童ともろ共に、

家路を辿る夕まぐれ、

童は笛を取り出でよ、

いとも優しく吹きすさむ、

我神州の人皆汝を忌む、所聞汝が一喝は山岳を振は
しめ、汝が一怒は風を生すと、我神州の人其勇猛に
賛す、汝が怒號雷叫何の益かある、唯々其爪牙を鈎
鋸し怯獸を追ふて得たりとあすは、唯々その「いた
づら」あるを以てあり、

我朝汝が祖國より、「虎」の字を得しより、汝が名稱
は我史上の遺物とされるもの多々……

加藤寅之助武名を竹帛に垂れ。大磯の虎女は、いや
しき身を以て、高尚ある名を後世に残し。虎切丸の
銘刀は父の仇討つ孝子のほまれを傳へ。虎の巻は六
韜三略の名と共に喧ましく。隣家の虎猫は昨夜一匹
の老鼠を捕へぬ。

汝の名は過去死骸の美談と化りて歌はる、然れども
汝は未だ其世に益するものあく、唯々一枚の革皮あ
るの外は汝の猛勇暴烈は「徒ら」あり、我汝が爲に
之を惜む、汝の一統——猫——は其鳴聲猶、針持つ
下婢の欠伸を助くるに足らずと雖も、纖爪一攫克く
老鼠を捕ふ。汝それ耻づるあきか

維時明治廿五寅の年、予は汝に戒むるもの即斯の如し、「予は勇を衒ふて暴あるの人を忌み、柔和にして眞個の勇あるの人を愛す」これ神州の精隨あればあり。

△卯

骨々生
三冬の壯遊は兎狩に若くかし、白雪の踏み荆棘をわけて長耳公を叱咤する、豈快からずせんや、古人曰く狡兔は三窟ありど、此小獸猶且つ數十獵夫の目をのがる、况んや世の小人狡黠の輩をや、

澆季の世三寸の舌よく法網をのがれ、道義の柵を破るもの果して幾許ぞ、苟しくも中堅國民と稱し君子の道を學べるもの、他日社會に立ちて彼等奸黠の奴を狩らざるべけんや。

△辰

有無生

去ぬる日の茶話會には難儀至極ふ辰てふ課題の宣告を受けたのである、爾來旦に夕に専心刻苦と迄も行

加ふるがためにわれ這輩と比肩するを潔とせず、かくは地下に潛めるあり、

漸風一過、驚いて我に歸れば室内暗黒依然として舊の如く、折しも響く城山の時鐘、風を破つていよ／＼凄い、さても不思議、今のは正しく夢であつた、して又合点の行かぬ城山の下……さては我親愛ある校舎に非ざるか……そもそもいかに……

これ余が腦裡に浮んだ瞬間の理想である、あゝ金龜城下、濠ふかきあたり、正しく一個の黃龍の潛めるのであらう、夢真か、將た否か、余未だ之を迷夢に付し去る能はず、正しく君……某君……余は君の将来に大に囁望するのである、噫此蟄龍抑も誰であるふか、余は今之を云ふ必要を見あいのである、

△巳（蛇にあたふ）

巖洲生

嗚呼あはれる蛇よ、さても汝の運命は、いと敢果あきものあるか、神は汝が姿貌を、いと醜く、さも慘らしく、造りあせり、造物主は、汝に忌はし

くまいが何くれ古書あご引すり出し、つまらぬ頭も絞りて見たが生れついたる空袋の思ふがまことに出でざる悲しさ、

處が去る夜の事不思議の一事件が起つた、

時はもう十一時頃でもあつた、日暮方より降り出した雪は大分積つたものか道行く人の足音の異様の響きが時々する、も早人通りもいつしか絶え時々吹きくる伊吹おろしの樟子に音あふ度毎にはだ身のそつこせらるゝへ、かすかに聞ゆる寒念佛の遠音しみこむ如く感せられた、それさへ今は聞えあいで身は天地間の一個とあつた、折しもあれ一陣の風さつと吹くよと見えしが忽ち現れ出でたる一個の怪翁、破顔一笑はるかに余を見下した、余は事のあまり意外あるに暫し言葉もあかりしが、氣をとり直してつと跪いた、やがて翁は徐に口を開き左の如く宣べたてた、

余は數年來城山の麓に棲める一龍あり、方今社會紊亂し悖徳の輩日にいやまして皮想の偽龍月に多きを

き、色彩を與へたり、されば情知らぬ人は、汝が面に睡し、頑童汝を見れば、直ちに石を擲つ、斯くては汝、如何にして、一日の安らけきを得むや、汝が牙を磨ぎ、毒をたくはへよ、やがては、汝に睡するの徒を噛み殺せよ、汝を鞭うつの人を、巻き殺せよ彼等をして再び起つ能はざらしめよ、彼等の心は汚れたり、彼等は天にそむけり、彼等は神の教を守らざるあり、彼等は富貴の外に、徳義を忘れたり、榮利の爲めに、他を咀へり、彼等は情を知らざるあり而も彼の徒は、怒濤のよせ來る如き勢もて、吾静けき世を犯せり、彼の徒は、益々世にはびこれり、かの漏流のうちに、溺れし人の、いかに多きぞや、斯くては、世を擧げて、彼等不義の徒となり、吾清き世は、彼等の爲に、汚され終るべきか。神は疾く是れを憂へ給へり、種々の御使の手によりて、此汚濁を清めんと、仕給へるあり、實に汝はその御使の一にてあるあり、汝が姿貌の獰惡、色彩の忌はしきを厭ふあ、そは神の特に汝に授けたる、人の善惡を

知るべき、唯一の機たるあり、汝が使命を完うすべき、最要のものあり。

咲き匂ふ、花の香たかきもとに、安らかに眠れ、而して汚れたる人の来るを待ちて、彼を囁めよかし、

△午

志 美 生

常に千里の能あれども、伯樂未だ之れを知らず、麒麟の才を顯さねば、驢馬にも劣ると思ひてか、やたら重荷を負はせつゝ、箱根八里の山道を、鞭よ手綱よさてはまた、りんく響く鈴の音にはげませば、何ぞ庸馬に異むらんや、彼の昌黎は馬前ますと誇りしを、高綱はあざいたくも鞭うち急ぎけん、池月磨墨といへば、世の人は皆駿馬ありとす、實に駿馬あり、されど千里の能を顯はしゝを、駿と言ふは易きあり、驛路に馬士歌のたえざりける頃はさておき午の貝吹く世も過ぎて、ドンと轟かす正午の時となりけれど、古に從ふは世の習ひか、牧場に繋げるはよそにして、かしこの馬は骨骼逞しうして俊れたり

柔かず心地にあつて、快き、嬉しき、平和ある、汚れのあき思想が、雲のやうに起るは、キツトのことである、そこで僕と小羊とは、愛の神の恵みの懷に抱かれて、自然の美を悟ることができやう。

ア、僕はどうにかして、苦しい「悶えの子」から脱け出でゝ。静けき、安らけき、長閑けき牧童となりて、可愛らしい小羊と、たゞひ一春ありとも、霞の野邊で心ゆく生活がして見たいものである。

今一つ云ふ、僕は飽くまで、小羊をこの世の「平和の神」と信するのである。

春の野に小羊の背を撫でん時、つらき思のもゆべくもあらず。

やはらかき小羊の毛の筆かけて、この世呪ふに吾忍ばめや。

△申（猿君よりの來書）

胡弟生

拜啓御存知の通り、拙者義は、猢猻と申し、俗に猿猴と呼ばれ、十二支の末席をけがし居り候者に有之

こゝのは筋骨太くして類ひあし、あざ言へり、牧場には果して駿馬あきか、譬ひ馬車馬の瘦せたればこそて、いざといふ事あらば、豈南山の陽に遊びて、秣草に飽くべき時のあからめや、

△未（僕とひつじ）

無心生

僕は常に思ふ、あの長閑あ春の野邊で、可愛らしい小羊と一所に、青々とした若草を敷き、すみれや蒲公英を枕にして、あたゞかお裾をしつらへ、そうして、僕の秘藏の蘆の笛を吹いたり、小羊のやはらかあ背を撫でたり、時には、會心の唱歌を謳うて、小羊をつれて散歩をしたりあざして居たあらば、さぞや、たのしいことであろう。

もしも、そうある時には、世の中の五月蠅い叫び聲は聞えぬであろうし、無暗に「罪の子」等に頭をさげて、おもねることも要るまい、従つて、怒つたり泣いたりする煩悶は、一切起らぬに相違ない、必ず小羊の性質のやうに穏やかあ、あの白い毛のやうに

候、御見掛けの通り、極めて不作法千萬あるものにて、元來山家育ちの不調法もの、日々樹登をこそし、至極上手に有之候、自分ながらその技倆に感服の外無之、爲めに輕率の振舞仕り候ものが、時々樹上より轉落して、臀部を打撲仕り候故、其部分かくの如く赤色を呈し居り候、何事も油斷大敵なることは今更言はずもがむと存じ候、柿色の耻も言はねば御存知有之まじく存じ候まゝ近頃耻入りたる事あがら、裏まず申上ぐべく候、拙者の幼き時と覚え候。仲間多數相戯れ居り候際仲間の臀部餘りに赤く候故大に指笑致し候處、己れのそれを見よと手を拍ちて冷罵まれいたく赤面仕り候。それより、かくの如く赧然たる顔色を呈し、今更、何とも致方あく、日々谷川の清水に面輪を相映じ、いこゝしくかこち居り候何事も己れの不能を思はで他の不能を笑へば、拙者の如き赤恥を搔く事有之べく候間隨分ともに御注意あらまほしく候、性來拙者は人真似が得意にて、實はその眞ねるものゝ眞味は知らず候、日本の人間も

隨分人眞似は得意らしく候これとても拙者のそれの如く、唯外國の巧みある製作品を一寸、皮想丈、眞似候て、得意に存じ居り候、故に碌るもの是一つも無之候、兎角に手先や鼻先の藝は駄目に候、また、拙者こそ當世ハイカラ連、乃至青年小才子流の好モデルに有之候、輕跳浮薄は拙者の特質かと愚考仕り候、元來小生は怒り易く、稍もすれば齒をムキ出し候始末、爲めに猿曳の老爺に時々お眼玉を頂戴仕候乍併拙者とても親や親友の義は存じ居り候、獵師に擊れ候親猿を温め候は御聞及びの御事あるべく、これ等は未だ人間の或社會の或奴等よりも遙か優りて居候かと已惚居候、何れ動物園に出張仕り候節は御面會万々申上ぐべく候勿々頓首

山の峠に柿の枯葉を片布きて、貅猴再拜

△西

磊々生

余一日郊外に出づ時に群鷄あり隊伍恰も遠征をあすものゝ如し、是に於て余異しみ近きて之れに問へば

△成

溪水生

體に浮ぶを覺ゆ、然り而して世人が、間諜を指してイヌと呼べるは何ぞや、蓋し間諜は能く物を臭き出すごいふ意より、犬の之れに類するを以て、しか名付けしむらむ、然らば何ぞ彼の夜に乘じて箱中のものさへも、能く臭き出す鼠に名けざる、犬は能く其主の爲めに、忠を盡す、嗚呼大乎大乎、吾人は彼の爲めに其の冤を訴えざるべからず

△亥

淡溪生

猪は其體恰も虎獅の如く、其深山にあるや一呼すれば則ち草木爲に震ひ、一嘯すれば則ち山谿爲に動く實に猛獸と云ふ可し、余一日之を園園に見る、鉄鎖を以て其身を約し、食を減じて其威を挫けり、故に猪は尾を搖して人に狎れ其溫容愛すべし、觀る者謂て曰く、猪は弄す可きありと、是何ぞ猪を知る者あらんや。威權の煌々たるは、猶朝敵東海の浪を蹶て躍り出づるが如く、聲望の隆々たるは、迅雷の轟々として山河を震撼するが如き、政治家、砲烟漆々として天日

則ち曰はく、吾等の主人衆鷄を遇する甚だ苛酷にして甚しきは吾等最愛の子弟を悉く捕へて食するのみあらず、來客あれば直ちに吾等は、あはれにも俎上一刀の下に悲惨ある最後を遂げざるべからず、かくては所詮此の世にあるの思ひあし、さればこゝに家主の留守を伺ひ之れが救助の策を議するあり、希くは大人仁恵を垂れ計を教へられよど、余曰はく汝等あやまてり、抑々汝等は終日悠々として一室内に横臥し日々主人より美味美食の供給を受け何の爲す所を知らざるのみ、汝等若し此の苦を避けんさせば宜しく自ら勞し此の渺々たる廣野を馳驅し、食餌を求め獨立自活せよ、妄りに寄食をもごめ安逸を貪る勿れど、群鷄唯々として去れり、

光りを隠し、彈丸雨注して地軸爲に撼くの戰場に、劍を揮ひ千軍萬馬の間に馳騁せる勇將と雖も、機を得ざれば、則小人の侮視する所とある、古人云へり勢窮即龍蛇亦爲螻蟻所制と信ある哉語や、今日二十世紀の新舞臺に縱横闊歩せんとする青年たる者は、機失ふ可らず、宜しく鉄の熱するに當りて之を打たざる可らず、然りと雖も事は成り難うして敗れ易く機は得難うして失ひ易し、之を以て賢者は時を知り機を見、英傑の士は天下の勢を達觀し、機の伏する所を現はす、彼の南洲翁が威勢を得たる機は、會津にあらずして、大島に入りたる時にあり、賴朝の霸權を握りしは、壇浦の戦にあらずして、富士川の戦にあり、豊公の天下を併呑せし機は、毛利氏を征せし時にあり、何とあれば天の其人に大任を與へんとするや、必ず先づ苦めて、然る後與ふるものあり、其他古今東西偉人傑士の政權を掌握し、大功を樹つるは、一に機を用ひ、勢を制するが故あり、噫々一勝一敗は機の一轉にあり、一得一失は勢の一變にあ

り、豈深く猛省せざる可けんや聊か猪を觀るに際して感する所を記すことを爾り。

◎天來の白矢

第四年級 門根米次郎

▲冷血動物

去年五月十四日我最も尊敬威服せる、西村捨三翁本校に來られ、生等幸に名士の演説を聞くを得たり。翁能辨あらずと雖、語句皆心肝より出で、云ふ所皆是れ熱あり心あり血あり、憂國の志士の言、我黨の心を動かす何ぞ其れ妙ある、誰か能く此の説を聞いて感せざるものあらんや。若しありとすれば我は是れ正に温度三十八度の温血の通ふ人間にあらずして冷血無神經の動物ありと云ふに躊躇せざるあり。而して我は此の冷血動物を現在目撃したるを如何せんいでや之を筆誅せん。

翁小楠公の話し中、感極まり漣然として涙両拳に溢る、誰か悲哀の念あからんや豈同情の起らざらんや

目頃は武勇自慢の若武者も感に打たれて、鐵の如き

長幼の禮混同して區別なく、兩者の間に愛敬の心あ

し、下級生は上級生に白晝道路に相逢ふとも、一片

の禮意を表せざるか、當然のことと思へるか、一向相

關せざるが如し、

余竊に思ふ、彼等は下級生の此無禮を悟らざるか、悟らざるにも非ず、然りと雖其行爲修まらず、其身下級生より敬を受くる威望あきの結果、之を詰る克はざるに非ざるか、笑止千萬、又疑問ある哉

(未完)

△偶言二則

第三年級 清水省三

△その一

一着の小倉服、吾は以て校堂に講義を聞くに足る、一益の古びたる佛蘭西帽、吾は以て我中學生たるを表彰するを得、色腿せたる外套、以て吹雪を防がざるか垢にまみれ泥によごれたる運動服、以てベースに事を缺くか、慈親の賜ひし一枚の綿入、寒を凌い

雙拳は膝上に置き、肅然として四百の頭は皆下にうあだれたり。此の時に當り、頭を左右に廻らして笑ひしものあり思ふに翁の涙を見て笑ひしあらん。

咄！何等の無神經ぞや、冷血ぞや、我は殆んど彼を

稱するの語を知らざるあり。悲哉我四千萬同胞の中にも斯の如き徒あるものゝ中にこれあるは決して許すべきにあらず。彼の心中熱あく、血あく、情あく、義あきあり。之を冷血動物と云ふ何ぞ不可あらんや。苟も人間の皮を被る以上は縱令外面のみにても今少しく人間らしきあれ。あゞ之に鐵拳を加んか、手の汚るゝを如何せん、之を罵倒せんか、口の汚るゝを如何せん唯彼の面に唾して後聊か快哉を叫ぶべきあり

▲長幼の序

一二年生は弟とし、三四五年生は兄とす、弟は兄を敬し、兄は弟を愛す、之を稱して長幼の序といふ。

これ我校長が平素生等に訓戒せらるゝ所あり、而し

て餘りあり、裾切れたる敞袴一領、威儀を繕ふを失はず。

何等の痴漢ぞ、狂人ぞ、敢て校則に反して羅沙服を調へ、角廂の帽子に、意氣と誇り、外套は裏付に非ざれば耻づべしとあし、「ヒモ」や筋に凝り固まりたる運動シャツを着、羽織は飛白よ、袴は白縞よど、凡そ頭髪の先より足の爪先まで、流行と派手と、身振と様子とに、心身をうちこむことの見苦しさよ。されど吾人は曰ふ、羅沙服あしきに非す、否或點に於ては却てとるべきことあり、角廂の帽子冠るべからずと云ふにあらず、否之を購ふの際に至りては却て利あることあるべけれど、只その一時の流行に騙られ「スタイル」を飾らんとするに汲々たる極、自己の境遇と相馳騁せざる風を装ひ、随つて強ひて他人の流行に後れざらんことを勉むが如き痴態を忌むあり、その外見とありて顯はるゝ事實よりも、寧ろその陋劣ある心根を好まざるあり。

家にはよし千萬圓の財産ありとも、父君は二重マン

トに金縁眼鏡をかけ給ひ、佛蘭西形の靴にてゴム輪の自轉車を乗り廻し給ふどもそは人のことあり、社會の生存競争場裡に獨立したまふ人のことあり、両親の脯を噛れる吾人學生の傲ふべきことかは、社會の裏面に栖息せる吾人學生の摸るべきことかは、それ丈の力あり、それ丈の甲斐性ありてあすことあるば吾人は云はず、未だ脳力の固定せざる、業の成らざる、意思の薄弱ある吾人は、決して邊幅外見を云々すべきに非ざるあり、「上方者」てふ嘲笑的語を甘受して、婦女子の如く徒らに外面を裝ふて得々たるは、果して吾人の責任あるか、吾人は必ずしも常識を具へたる人を俟たずして、其是非を知るに苦まざるあり。

△その二

一流の少年輩あり、上級生とし謂へば只徒らに低頭平身、阿謾詼言し、只管その怒りに觸れんことを恐る、而してそが裏面を窺ふ時は、同氣相集り同類相會し、猥りに上級生を誹議し譏謗し、冷評し罵詈しよもや彼等の蠕動的生活を容るゝ餘地を有せざるべし、邦家の前途豈寒心の極あらずせんや。

更に進むで彼等の嗜好を觀察すれば、三嘆してあは忍びざるものあり、勿驚、彼等の嗜好とは、スタイルあり、身振あり、吁、

吾人はこゝに彼等内容の細狀を剥扶するに吝まるものに非ず、されどこれ以上は到底吾人の神聖ある筆端に上すに忍びざるを奈何せむ。

上級生に對しては行ふべき禮讓を施せ、云ふべき言論を吐け、しかもそは總て赤誠あれ、皮相形式たる勿れ、されど上級生あればさて決して其好意を迎ふるを心掛くる勿れ、その怒に觸れんことを恐るゝ勿れ、汝等にしてよく汝等のあすべきをあす、何處にか他人の憤怒を招くべき原因の伏在を許さむや、而も尙汝に對して不好意あるものあらんには、そは既に汝等の長者たるべき資格を喪失せる不具者あり、汝等の周圍豈這般の人物あるべきぞ、然則汝等は、只汝等の正しき意識に服従して、爲すべきをあし、

甚しきに至りては、そが淺薄ある見解を以て計り知られぬ他人の精神界に闖入して、そを評價せんとする痴も亦甚しい哉、而して彼等には理想あく趣味を解せず、卑屈ある平凡ある意思の外は悉くジロありといふに至りては、吾人は寧ろ憫然たらずんばあらざるあり、且彼等の沒分曉ある、理想高き人を見ては「エラサウナ」人とあざみ、銳才ある人を評しては「ブツタ」人と笑ふ、もしそれ偶々彼等に一片の赤誠を呈して苦言一番する者あれば、彼等は之を以て、「眞面目を裝ふ人」「生意氣あ奴」てふ一語の下に葬り去るのみあらず、之を忌むこと蛇蝎も啻あらざるあり、あゝ、吾人は繰返す、彼等の眼中には理想ある趣味あし、況んや主義をや、况んや決心おや、何ぞ况んや德義をや、宜あり所謂彼等の友人に一朝災禍の襲ふことのありぬども、彼等は平然晏然之を對岸の火災視せるや、彼等はそもそも中學を卒へ大學を出づるの後、如何にして多艱崎嶇の人生を横斷せんとするか、現時の社會は如何に墮落せりとは云へ

云べきを云へは則足る、翻つて汝等の半面に於ても亦さあれ、決して他人の誹議讐言を敢てせる勿れ、試に一晒せよ、縱へば汝等のある者が、よし口を尖らし泡を吹き、友人を喜ばせ同類を笑はせて他人を誹議すればど、そもそも何の得る所がある、そは疑もあく汝の愚を發表すべき唯一の利器たらんのみ、況んや子弟の分際として長者を軽するは、これ勞働社會に於ける劣等ある現象に過ぎざるあり、况んや汝の思想の他人を是非すべくもあらざるをや、豈一時の高慢面を逞うせんがために、自己の良心以外の意思を助長せしむべけむや。

年少人を誤り人を誣る徒よ、尙以て汝等が墮落せる腦漿を洗滌するを肯せざるか、あはれ。

△その三

吾は嘗て一點、五分を争ふ試験點數の奴隸となりにき、されどそはあまりに我理想に觸れぬ、吾は又嘗てその成行に放任して點數成績の如何を思はざりきされどそは人の誤認を招くに餘りに速ありき、よし

理想に觸ることのありぬども、吾は遂に點數の奴隸となり、俗流の好心を買はざるべからざるか、又例ひ人の誤認を得んことのありぬども、吾は飽く迄自己の實力に倚頼して、高く超絶したる思想を保持すべきか。

されど、たゞへ吾に名譽心の勃々たるものありとも吾は我理想を傷くることを欲せず、何とあれば吾は我理想の爲に學びてあるものあればあり、されど又我は自己の實力によりても他人の誤認を甘容すべき寛廣の餘地あきを如何せむ、何とあれば吾は熱情過激の男子あればあり、あはれ、何れか吾によくして何れか吾にあしき、顧みれば吾は實に一家てふ責任を帶ぶ、再懲すれば我理想は高く吾を照せり、この責任の下に自覺し、この理想によりて起たんとす、我學海の航路亦難い哉。

雖然、やめあむ、やめあむ、吾はあまりに小心ありき、豆大の懊惱によしあき妄念を費したりけるよ、それ人は理想によりて生き又之によりて死す、五十

年の逆旅畢竟理想の小さき片影のみ、今の素養基礎時代に於て、よし人の誤認を蒙るども、俗物の嗤笑を受けぬども、吾に於て何かあらむ、神聖ある我思想を汚されむよりは遙か優れり、かの碌々者流に化せられむよりは一層可あり、吾は断じて目前一期の榮華を夢みざるべし、點數成績の奴隸たらざるべし心知らぬ人のたゞへ笑へばとて譏ればとて我清き心は我理想の神を除いてはた誰か知るべき、吾はこそに安心立命、大悟洞觀して奮然未來の希望に突進せんとするあり。



雜事彙報

○本校日誌摘要 (自明治廿四年十月一日至明治廿五年二月十五日)

- 十月一日 本日以降午前九時始業、午後三時終業。生徒一般冬服着用。
- 十月九日 崇慶會決算報告の件に付會長、部長、副部長、並理事、總代都合十五名集會、郡司大尉の談話會。
- 十月十日 京都府第一中學校職員生徒百七十四名來彥、下村、山本兩五年級長慰問。
- 十月十六日 今井恒郎氏來校講話。
- 十月廿一日 伊香郡東野小學校職員生徒二十七名來校。
- 十月廿五日 文部省視學官中川謙二郎氏、犬上郡視學若山才三郎氏、本縣視學山田胤士氏來校。
- 十一月三日 天長節拜賀式、陸上大運動會舉行。
- 十一月九日 本校生徒修學旅行(向六日間)。
- 十一月十四日 本縣師範學校教諭兼舍監山岡爲氏來校。
- 十一月廿日 愛知郡高野小學校職員生徒約二十名來校。
- 十一月廿二日 矢坂本縣視學官、水谷縣視學、若山本郡視學來校。

年生威儀堂々表勝旗を擁して會場に現はる、進んで會長席に到る、會長代理之れを受けて高く捧げらるゝや、爆然二十一發の祝砲合圖に競走は開始せられたり。

一周競走、二周……三周……四周……と間断なく競走せり、大抵ロングコンバスの者は勝を占めショートフィートの者は敗る。

二人三脚——何れも紅顔の初年級にして仆るゝあり轉がるあり、沈着にして能く共同するものは先んじ輕卒にして歩調亂るゝものは後る。

和装競走——急がざるべからず、急ぐべからず、着裝餘りに匆卒にして決勝点に至てアウトとなるもの多し急かれて緩かれてはこの謂あるか。

剣道装競走——武者の第一義たるべき禮義沈着は此際用に立たるものゝ如し、走り乍ら面胴をつけ、竹刀を握る、たゞ敏活あると迂遠あるとに由て先後の別あり、機を見るは兵家の要か。

兵式装競走——一發の號砲は正にこれ兵營非常の喇

の對陣せるが如く、幾千の觀衆は手に汗を握りて両軍の旗色を凝視せり、一人の身は一軍の身、一旒の旗は一軍の命數あり、共同の必要これを以て知るべし赤軍遂に勝を制せり。

障碍物競走——中々複雜ある競走あり、此際必ずしも器械体操の規律によらず、柵を越ゆるに姿勢を執るの暇あく、身軽にして能く飛び能く跳ぬるもの勝を制すと雖も、平素の練習ここに於てか顯る。

小學校競走——無邪氣ある幼年隊の競走として頗る愛嬌あり。

斯くの如きもの三十二回、今や最後の活劇は目前に迫れり、選手競走——これ此會の尤物、級別選出の十健兒は現はれたり、腕を扼するもの、手をさするもの、何れ屈強の士にあらざるはあし、各級の生徒は選手の一舉一動に心を配り、山あす觀衆の視線は悉く此十健兒に注がれたり、やがて審判員が銃の引金に指を置くや、爆然一聲十健兒は齊しく駆け出せり、勝敗いかにと凝視すれば、或は先んじ或は後れ

吠に異あらず、武夫國家の急に赴くの用意あかるべがらず此競走中々壯快ありき。

已にして城山の鐘聲十二時を報す一同晝食。午後不動流の柔道あり、形——草摺、鎧返、絹被、兜返、源氏車、受方門根米二郎氏たり。

亂取數番、何れも揚武館稽古の面々、神技鬼術を用ひ奇策妙計を尽して勇壯天を衝くの概あり、審判員は本校嘱托の山上重太郎先生其人あり。

次で剣道三人抜あり、竹刀の音はいたく觀衆の注目を牽き場の中央忽ち龍擎虎攫の活劇は演出せられぬ叫聲雷の如く一瞬の隙を伺ふ若武者の意氣想見すべし、快刀一揮肉飛び腕落つるの感あり、殺氣紛々。秀生競走——これ級別二人の優等生、平生健筆あるものをして健脚を競はしむるあり、豈一大快事あるずや、文武兼備して始めて濟々の士と稱するを得べし、その第一着の功を奏せし者は下村紫郎氏にして之れに次ぐを岩崎秀一氏徳永乾堂氏とあす。

千鳥競走——白赤両軍の相持する様は恰も源平二氏

一周二周末だ優劣を定め難し、三周の初めに於て四年級の選手澤村專太郎氏衆を抜くこと數歩決勝線いよ／＼近づく、衆目何れも選手の威勢を見較べ中原の鹿は最早澤村氏の頭上にありと思ひきや、少しく後れたる五年級の選手島田善次氏猛然奮躍疾風の如く駆け來り、見る／＼澤村氏を後ろにして花々しく決勝点に入る、第二着澤村氏第三着二年級選手中西源澄氏たり。

茲に於て職員生徒一同は西方を正面として弧狀に整列し、嚴めしき賞品授與の式あり、島田善次氏徐ろに進んで第一等の賞を受け、紫色絢爛たる名譽の優勝旗は満場の喝采聲裡に同氏の握る所とあれり、澤村氏は第二等賞を中西氏は第三等賞を受けたり、一同君が代を三唱し散會す、時に午後四時。

因に云ふ部長以下理事委員諸氏の銳意斡旋により諸準備整頓し、着々競走を繼續して毫も混雜を見ず、又五年級が他級生の感情を害するを欲せず、從來の慣習たりし凱歌を公衆の前にて歌はざりしが如きは

前回に比して確かに一大進歩と云ふべし。

陸上運動部「メダル」授與式 去る十一月三日陸上運動會優勝者に、授與す可き「メダル」は、當時都合により授與せざりしが三月二日午后放課後會長以下列席して授與せられたり受賞者諸氏は

五年級 下村紫郎
同 島田善次
同 大音政太郎
四年級 小島正之
同 宇治原孝三
同 玉樹顯曜

あり

因に記す、夫れ吾人運動の必要や、言をまたず、されど之れを以て職業とあすに非す、修學の餘暇身体を練り、精神を養ふの方便に過ぎず、然るに從來は唯だ、優勝者には銀製「メダル」を與へしが、斯くの如きにては本會の主意に、反することあきにしも限らず、故に今回會長の意見により、鉄製「メダル」

に古人の名言を刻したるを永久本會の名譽ある「メダル」と定められたり、故に若し當賞者にして、其の体面を汚すが如きことあらば、直ちに返附を命ず可く定められたり、而して此の名譽ある「メダル」は運動に限らず、一般に及ぼし且つ之れを重せしむると共に、德育の一助とする目的とせられたり、

◎軍司大尉の演説 口に論語を説けども操行治らず、滔々机上に天下の政を談すれども一家を治むる能はざるは、現今社會の狀態あり、然るに北門千里怒濤山の如く、極寒指を墜す所、同志と共に一匹儔を求めるこすも難いかあ、今や、大尉諸國遊説の途にあり、十月十日を以て當地に立寄られ本校の請ひにより同日午后二時より一場の演説をせらる今其の大要を記さんとす。

一千島の沿革、抑も本島に關しては古より數々書にも記載せられたれど、果して何人が初めて我國に紹介せしやと云ふに、大阪の船夫五平と云ふもの、暴

義會と云ふものを設けて、彼の地に移住することあれり。

千島の價值千島群島中占守嶋、小ありと云へども、形勢最も事をあすに適す、他は比するに足らず、何とあれば、片岡村上等の良灣ありて、船舶の出入に便あり、故に「ベイリング」「オコック」両海の、利益を掌握せんとすれば、是非とも根據地を本島に定めざるべからず、彼の「ピクトリヤ」人の根據地は實に此所にして吾等も亦此所に根據を定めしあり、占守島附近は、世界の三大好漁場と稱し、海獸魚族の多きは云はずもかあ、殊に「アライト」島附近は鱈の產夥しく、其の收獲、一人一日恰ご二百尾に及び世界第一の鱈の產地、「グローバスター」に優るども劣ることあけん、又「オットセー」捕獲の如きも、隨分利益ある業あり、而して此地の漁業は、日本人の占めざるべからざるものあり、何とあれば、本島は北緯五十度以北の地あれば、魚を乾すに由あく皆鹽漬にせざるべからず、然らば此の如き魚は、我國を明治二十五年不圖せしことの導火線とありて、報効

除きて、他に輸出す可き所あればあり、故に我等當地に移住してより、常に本邦人に報道して此地の漁業を營まんことを、切に勧告せしが、漸く昨年に至り、邦人の續々、渡航するに遇ひ、少しく積年の思ひを慰むるを得たり、余其漁場を見回りしに、到る所大獵にて、海濱一面激渦たる魚の山をあし、漁民の喜び一方あらざりき、實に六十万の投資にて百八拾萬圓の利益を得たりと云ふ、其有望あることを推知すべし、斯く些々たる小資本にても然り、若し大仕掛にて斯業を企てんか、其利益、蓋し計り知るべからず。

航海に付いて、前述の如く、此地の利益莫大ありと雖船舶の航海稀あるを以て、不便を感じること大あり、故に千島定期航海は目下の急務ありとす、然るに我國目下の状況は、千島は愚か北海道にも行届かぬ有様あり、嗚呼斯くの如くにして果して北海の發達を望み得べきか、實に浩歎に堪へず、思ふに、諸子は海運上如何ある觀念を有するか、將た船員に對

さす、而して社會の彼等を待遇する、亦懇意にして苟も、二十年以上、海上生活を營みしものにして、老年職務に堪へざるものは、特に其者の隠居所を設けて、相應の生活をあさしめ、以て其餘生を送らしめ、船長の如きは、實に優待を極むと云ふ、顧みて我國は如何に果して斯の如きを得る乎、實に汗顏の至りに非すや、諸子は、將來の社會を形造る有爲の人あれば、是等の事業は、皆諸子の雙肩に掛れるものあり、希くば諸子よ、他日此の大事業を完成して以て國威を發揚せよ、是余の偏に囁きする所ありと。

◎秋期野球大會 例年本校に舉行せらるゝ秋期野球大會は十月二十日を以て舉行せられぬ。當日午前九時頃已に本校運動場裏は白色運動服の影點々アンパイラーの叫聲いと高かゝりき、平和の氣もて充たされたるグラウンドは何時しか叫喚の修羅場となり、第一戦、第二戦、第三戦、と次第に盛に、時の移るを知らず、午後四時頃散會せり、此戰に於て第一戦は初陣の若武者にてバットを手に

しては如何、吾人の見る所に於ては世人、往々にして船長其他を、輕視し、單に船を運轉せしめ、舵を取りるもののみ、誤認するものあるが如し、思うても見よ、彼の乗客中には、或は大臣もあらん陸海軍人若しくは、學者も在らん、然して其を能く、督御するものは、船長に非ずして誰ぞや、斯の如き業、何ぞ易々たらんや、然るに、我が日本人にて、船長として外人に信用ある、人物、果して幾人を有するか、思うて茲に至れば實に悵然たらざるを得ざる、日本人の斯の如きは、種々原因もあるべけれども又日本人其の者の品性低きに、歸因せんばあらず、ミ氏は更に英國海事上に及んで曰く、英國は海上王と稱せらるゝ丈け、其海事上の制度も完全せり、故に船長たるもの、甚だ重要視し、如何に斯道に長すとも、數代斯道に從事し而も、文學法律醫學理學に一通り、通するに非ざれば決して其位置に置かず、而して年齢も四十歳以下の壯年に非ずして六十以上の老功の者に非らざれば決して、船長となる。

第三戦は老功の士、平素の手練あらはれて、飛ぶボールも目に見え兼ねるほどの早さ！ストライキの叫びも何となく榮えて一人の勇を起さしめぬ、

健在あれや諸君、吾人は明年再び諸君が勇ましき運動服の影にまみえんことをのぞむ。

◎今井恒郎先生の演説 客歲十月廿二日前本校長今井恒郎先生、關西地方漫遊の途次本校に立寄られ、講堂に於て教育上の講話をものせらる、旨意一々肯綮に當り吾人が頂門の一針とあすべき處のもの、即ちこゝにその概略を記す

諸子はすでに日々諸先生の訓陶をうけてあるものあれば、こゝに予の事新らしく曰ふべき節もあけれども、頃者學生墮落の聲漸く喧しきをもて、その原因

たる學生の缺點につき予が所見を吐き、諸子の参考に資せんとす、予は方今之學生の最大缺點は左の二箇條ありと信ず、

一、理想に乏しきこと、

二、無形的に社會を知らざること、

まづ第一につきて曰はんに、凡そ人理想に乏しきときは萬事本幹を離れて枝葉に趨り、其肝要ある點に遠ざかる、而して希望なく、前進力なく、嚮往する所なく、只管眼前の小利害に拘泥し遂に醉生夢死するに至らん、又一個人の理想は國家の理想にして、個人の理想に活氣あく品性を重せざれば國家亦決して強からず決して文明あらざるあり、諸子試に英國を見よ、英國人の理想とする所は實に、品性を陶冶し紳士を作るにありと、これ又則ち英國の理想にして、その世界に雄視せる原因是實にこの理想ありと謂ふべし、予嘗て英人ジョーニット氏に問ひて曰はく、「貴國の大學生は如何ある事を教ふるを目的とせらるゝか」と、氏答へて曰はく「啻紳士たることを教

戀々とし、共に相率ゐて理想あき無法ある國民となり了るのみ、のみあらずその惡影響の及すところ中學生に波及し墮落の原因たらしむるあり。」

而してこの理想と云ふものは決して特殊のものにあらず、唯自己の腦中に一の崇拜すべき模型的人物を固定して、自己をして一步一步これに近接せんと欲するにつとむるのみあり、而してその理想は心身の發達に伴ひて時に變遷すと雖、智識の度の高まるに従ひ至善至美ある理想を決定し得べし、「三ツ兒の魂百まで」といふは、これ即ち幼時に理想させし感覺の終始其人の進路を指すに至るがゆゑあり、故に理想あき人は、自ら學ぶ所の何たるを知らず、果敢あき人物となりたるものみ、故に苟も學生たるものは、必ず理想を固定し、理想を高尚あらしめざるべからず、古の所謂立志とは、則ち理想にして、一の希望の一の願望をたつるはこれ志をたて、理想を樹つるあり、されどかの劣等ある望、些少ある目的はこれ立志にあらず、卑しき情慾に外あらざるあり、要之、

「へてあり」と、これある哉、これ實に英國の英國たる所以ありと謂ふべし、翻つて獨逸を見よ、彼國は只管學術の蘊奥を極めんことに意を用ひ從つてその學生等には、専ら研究の人、理想の民たらんことを教へてあり、これ則ち獨逸國の大理想にして、今日彼國が眞理を發見し理學的の進歩を著しくし、學術技術の中権とありて、かの商工業の盛ある英國と拮抗せるは實にこの理想の賜と云ふべきあり、彼國の大學生、大學教師等は如何に學理的觀察をほしいまゝにし、緻密精細ある眼光を理化學的智識の上に輝かしてあるかは、實に獨逸の真價といふべきあり、更に眼を轉して我國の高等學術を學びてあるものを見るに、果して英國人の如き品性を重んずる理想を保持せるか、將又獨逸人に似たる思想の人たらんとする理想に支配せられてあるか、悲しい哉予はその何れにも及ばざるを斷言せざるを得ず。

彼等は唯學位稱號を理想として、品性の陶冶の如きは眼中に置かず、目前の利害に進退し、名譽富貴にあり。

理想とは智力才能によりて修養せられたる人間の目的一にして、道徳上の立志あり、則ち志を立つるは理想を立つるに等しく、理想をたつるは人物たるべき要素あり、故に理想あければ、日常の行動、學問は何の爲にかしてあるかを知らず、即其人の嚮ふ所を知らず、これ方今學生の惰落せる原因の大なるものである。

次に無形的に社會を知らざることに付いて曰はんに學生たるもののが社會の出來事を一口に知れとは曰はず、されども社會の何物たるかを知らざれば、異日學生諸子が社會に立つて活動すること能はざるべし何とあれば活動と云ふものは、社會を知り國家を知らざれば決して能はざるものあればあり、往古封建時代に於ては、人民の階級士農工商の四に分れ、其別甚しきが爲めに各一社會を分成せり、これ個人的小社會にして今日の所謂社會とは大に異あり、然るに其餘風の延いて今日に及ぼせるもの、今日四海一社會の時代に至りても偏狭ある觀念を先天的に人民

の腦中に印するに至る、これ予の最も憂ふべしとする所にして、蓋しこの偏狭ある觀念は膨大して利己主義があり、國家を忘却する弊あるを慮ればあり、凡そ害惡を爲さるは易ありと雖も一步進んで善美を行はんは難し、こゝを以て今日の國家的社會を知り、道徳上の新智識をこの社會の上に活動するには少くとも社會の何物たるかを知悉する要あり、社會を知らざれば公益を知らず世務を知らず、折角修得したる學術遂に死學に終り、人を利し世を益するこそは望むべからず、斯の如くんば則社會本來の主旨に反し國民たる義務を喪失せしものと云ふに憚らざるあり、由來我國は愛國心に富むと曰ふと雖もこれを實蹟に徵するに、英國の如きは却つて我國以上の愛國心あるを見る、日清戰役に於て成程勇武報國の精神の發輝を見、愛國心の實歷はありしむらんも、かの英杜戰爭に於ける、英は富大にして杜は貧少、從つて英國の軍費軍兵に困まざるは明白ある事實にして、到底日本の支那に對する程の苦心は要せずと

いふべし、これ後日國家の患であるべき原因ありとす學友はこれ社會に於ての仲間あれば、苟も教育を受け國家に尽さんとする諸子は、正にこの學生時代に於て學友と親しみ、長上を敬し、異日邦家社會の一員となるべき階梯を築くべきあり。

泰西諸國又こゝに見る處あり、大に社會を學生の腦中に入れて國家的教育を施さんとしてあり、我國將來の幸福を増進せんとせば、宜しく邦家の卵雛たる學生をして無形的に社會を識らしむる要ありと信ず社會を知らば、共同心起り公共心生す、かの公德養成論の如き忽焉として亡滅せんのみ。方今學生の二大缺點、こゝに漸くその大体を述べ得たり、希くば諸子この邇言を察し、他日邦家有用の人材たられんことを、と。（終り）

◎第一回對同志社野球仕合 維時明治卅四年十月廿五日、初度の合戰に不覺をとりし同志社軍は再び前耻を雪がんと、會稽の恥は嘗膽の苦、彼は

雖、しかも英國民が傷病兵扶助金として政府に献せずは貳百參拾萬磅の巨額ありき、以て彼國民の敵愾心の如何に大あるかを想察するに餘あり、而して日清の役にはこれ等の事實を見出す能はず、かの箇人主義を尊び、個人的に成立したる英國にして尙且この美舉あるは、これ實に彼國民が社會を知り國家を重んずるが故あらずとせんや、愛國心を以て稱せらるゝ我國が、此點に於て却て個人主義の英國に遜色あるは、畢竟我國民の社會を知ること、淺く、從つて國家でふ大觀念を忘却したるが爲にあらざるあきか、我國人は忠君愛國の先天的觀念を有すと雖も、社會でふ點に於て暗きが故に、動もすれば自己流に流るゝ傾向あり、豈國家の爲め憂患すべき現象あらずとせんや。

夫れ學校でふものは一の社會あり、されば一學生はこの社會の一員たるが故に、この社會の一要素ありもし一學生にしてこの社會を知らず、利己主義の行動を敢てせば、この社會の不和不規律元より其所と

復讐！　あはれこの場に逃ぐるは卑怯未練、さりとて返り討せられては大事に候ぞ、と額を鳩めて驍將の面々、あれやこれやと評議とりどく、況んや先きの將卒、屈強の若武者、故ありて校を去るもの三人爲に我野球界には一段の影響を受け居るの時も時あるに於けるをや。

例令勝敗は天運に任かすとも、今一合戦致すべきは當理の條ありと、こゝに又一合戦は始まりぬ、花あらば薈、の如き我野球界、今や一度同志軍に勝を得たり、とて何條油斷の出来るものぞ、我軍のバアチーは前回と稍々異あり、同志社軍も亦大に初に相違す、戦は午後一時を以て開始せられぬ、又これ近來の快事、壘上壘下人は堵の如く觀る、

雄勢々々、敵も雄、味方も雄、いづれ劣らぬ益荒男の、こゝを先度と戰烈し、鋒先銳し、回を重ねる數我軍少しく敗る、敵も味方も一心不亂、觀者手に汗を握り、呼吸を凝らす、

回數九回、終に我軍の敗となり、敵軍の勝である、

我軍の意氣益々壯んに呵々バツトを睨んで大笑す、敵又勝ちて誇らず、男らしき哉々、時方に黄昏に近し、同志社軍は欣然として歸る、我軍又遠來の勞を謝して之を送る、兩軍の意氣、思はず觀る者をして快哉を呼ばしめき。

「同志社万歳……」

「滋賀第一中學校万歳……」

聲雷の如く、講堂と寄宿舎とに響き渡る。

○岡田先生を送る——秋氣高く、讀書の好期ある十一月、その九日と云ふに、我敬愛せる岡田先生は職を辭せらる、吾人恨みあき能はず、うれひあき能はず、かうしみあき能はざりき、されどそは天あり、命あり、吾人また何をか言はん、たゞ先生の從來の懇篤ある御指導を謝し、將來の御健在を祈る、終りに、更に、先生が雜誌部に副部長として、本誌のために盡瘁せられしに、深き感謝を捧ぐるにあん、

○修學旅行　客年十一月九日本校職員生徒三百七十二名は、秋季修學旅行の途に登りぬ、當日大阪

合才智穎敏ありとも、之の精神を欠かんか、事に當り猶豫決せず、遂に事を敗るに至らん、殊に吾等學生の万難を排して、進まんとするものは、猶更欠くべからざるものあり。

第二席 俊豪星亭

第五年級

藤田 義亮

星は一世の偉人あり、彼れに絶大の手腕あり、山の如き膽を有せり、又如何ある打撃にも堪ふる勇氣と忍耐とを有し居り、嗚呼彼れ斯くも人に秀づる、諸徳を併有せり、而も世人の攻撃点の中心とあれり、豈に故あからんやは、抑も彼の事跡を見るに、往々

に公徳を欠く嫌あきにあらず、即ち彼が眼中希望即ち、野心あつて理想あきは、甚しき彼の欠点にあらずして何ぞやと、流暢の辯を以て縦横に論評せり。

第三席 吾等の大愉快

第五年級

堤 直一

學生の愉快に種々あり、然れども協同して事を成す即ち苦樂を俱にして事をあすに若くはあし、彼の修學旅行の如き、蓋し好適例にあらずや、思ふに日本人は此の点に於て欠けたるが如し、然して寄宿舎は

一泊、翌十日は城東練兵場に於ける二府十六縣中學校分列式に參列し、其夜大阪一泊、十一日大阪出發四條駒着同所一泊、あくれば十二日陸路奈良に行軍十三日奈良出發途中笠置の古蹟を吊ひて上野着、十四日は上野より拓植に至り陸路貴生川に向ひ、近江鉄道に乗じて歸校せり、過ぐる所の國四、日を閱するここ六、到る所の山川風色、吾人に無形的活歴史を教へしこと妙からず、別にものせる修學旅行記、希くば吾人の見聞せし一端を發表するを得んか。

○演說討論大會　蟬聲樹に喧しく、午睡の夢を破る季は、已に過ぎたり、白露蘭叢に滴り、秋風松葉を拂ひて琴瑟を鼓するが如し、此の時や思想自ら潰涌する時あり、即ち我が演說討論部は、十一月十九日午后一時を期し、本校講堂に定時大會を開會す、先づ部長開會の辞あり、續いて辨士陸續として登壇す、即ち

第一席剛毅の精神

第二年級

花房 季麿

夫れ社會に處するには、必ず剛毅の精神を要す、假其協同生活を實行するに、好箇の練習場にあらずや

こ、

第四席 英語に付きて

森脇 先生

英語を學ふに、意味を之れ専らとするは不可あり。發音を勉め、其の大要を知るを以て、要とす、蓋し實用の世の中には、斯くあらざるべからざるものあり余諸子の研學に付き觀察せるに、或は直譯に流れ易く、或は讀方の抑揚頓挫にも心掛けざるが如し、之れ實用上大に不可あり、懇々として切に其理由を説かれたり。

第五席 奢侈を戒む

第五年級

廣瀬勘次郎

諺に稼ぐに追付く貧乏あしが、勤儉あれば、万事物足りて種々の善事を行ふを得べし、然るに身に綑布を纏ひ、頭に香水を塗りて、得々とするものあり抑も彼等は美裝を以て、人格を貴くあすものと思惟するか、知らずや淡泊ある風采の、却て人格を高くするを、然して奢侈の弊我國に治くして、風靡せしより國家益々貧にして、總て事業の發達を妨くるや

大あり、嗚呼奢侈の弊も亦至れるかあ、况や吾等學生の父母の助力を仰ぐものは、殊に心を茲に存す可ありと。熱誠言語に溢れたり。

第六席 實業は目下の急務 第五年級 下村 紫郎
實業は國家の生命あり、軍備行政能く備はるゝも、財政紊亂をれば、何事をも成す能はざるあり、殊に國家の原動力を養成する、教育をも施す能はざるあり、彼の英杜戦争は好箇の適例あらずや、翻つて我が現状を見れば、實に寒心せんば非すと、滔々として現時實業界に付きて、論評を試み、終りに絶叫して云く、望むらくは諸君、唯だ猶太人たるあかれ又現日本商人の如くある勿れと。

第七席 言文一致 第四年級 大久保章彦
はじめに言文一致の論を主張し、更に修學旅行廢止論を説けり、吾人は斯くも奇論を吐く勇あるを、實にく賞揚せんばあらす。

第八席 繪畫に付きて 増田 先生
壇上悠々として曰く、繪畫に付き、種々趣味ある話

壇して、討論題富は道徳上に良影響ありや、否や、に付て説明を與へ直ちに開始す可き旨を宣告せらる折りしも一隅に呑ふものあり、良影響ありと之れを導火に江畑、林、藤田の諸君、各孔孟の説を引き、或は歴史を引証して、滔々として快辯を振ひ、甲論乙駁、舌戦漸く酣にして論議紛々として盡きず、而して可とするものは、曰く江畑、藪田、柴田、不可とするものは曰く林、藤田、今村の諸君にして、快辯縱横、言一言滿堂の人之れか爲めに醉へるが如し而して不可とするもの、常に優勢にして林君藤田君の説最も聞くべし、時しも城山の晩鐘は正に六時を報じ、恰も閉會を促すものゝ如く、暮色蒼然滿堂の眉目、漸く辨する能はざるに至る、是に於て議長宣言して曰く本題の論旨容易に盡し難く且つ時間あきを以て、割愛して決を次回に取らんこ是に於て君が代を三唱して散會せり。

◎廣田小出兩先生 白駒の隙過ぎ易く、光陰矢の如し、天高く秋清き、十一月三十日、曾て勤務

を述べんとするも、恨むらくは時間の許さるをされば簡単に述べて、諸君の参考に備へんとする、抑も西洋畫は之れ皆學理上に則り、光線又は遠近を寫す、實に真に迫る觀あり、我國固有の繪畫、元よりものあり、即ち彼の畫家の箴言ある、丈山尺樹寸馬豆人又は遠人無目遠樹無枝遠山無芝遠水無波とは、幾何學上の定理其まゝあり、又彼の葉あるものは軟く、葉無きものは堅しこと云へるが如き、或は古木枝を垂れ、節多くして中は枯るあざと云へるも、西洋畫家の箴言と異なる所あし、殊に彼の十二の要言にては蓋し、全く相同し、嗚呼經驗の効果も亦大あらずや、而して繪畫は是れ美術の眞體にして、之れを以て一代の風習をも、支配し得るものあり、故に畫家自らも、高尚ある理想を描出し、其れに向へば觀る者をして襟を正さしむるが如き者を描寫するに心掛けざるべからず、懇切に注意を與へられたり終に宿題の評論會あり、時に午後五時、佐藤部長登

演習の爲め、入隊せられたる、廣田小出兩先生、任満ちて、再び教鞭を我校にとらるゝあり、生等親しくこの両先生の、嚴正にして且つ懇切ある、教誨薰陶に再び浴するを得たり、幸福何ぞ之にしかん、両先生曩に本校の爲めに、大に盡瘁せられたり、今回再び我校の爲めに盡されんことを、両先生の熱心ある、必ずや本校の隆盛を來さんこと、吾人の敢て疑はざるところあり。

◎橋本先生を迎ふ 嘗て岡田先生を得て喜びたる吾人は、同先生の辞任せらるゝに逢ふて離愁の悲みに泣きぬ、されど、こゝに十二月七日、橋本先生を師と仰ぐの榮を得て、愁眉こゝに開きぬ、先生は岩手の人、國學の蘊奥を極めらる、吾曹は實にこの良先生を得たるを喜ぶ、先生の一日も永く、吾人を捨見て給はざらんことを、今先生を迎ふるの際に當りて、希ふことしきりあり。

因云、同先生は又雑誌部校閱委員として、本誌のために盡されんことを、吾人は刮目して先生の傑作

を拜誦せんかむ。

◎新井副部長　岡田副部長ゆかれて以來、雑誌部副部長を欠くこと日あり、會々新井先生本校國語科教師として吾人を導かるに會す、即同先生は去る十二月二十日本部副部長を嘱託せられ、こゝに本部の役員完然せり、聞説先生は從來新聞雑誌に経験深く、這般の事業は實に、先生の得意とせらるゝ所ありと、吾人はこの良副部長を得たるを喜ぶと共に先生が一臂の勞力を本誌の上に寄み給はざらん事を切に希望して止まざるあり。

◎第一學期試験　嚴正ある吾人の試験は、吾人の價を評讐せんが爲めに、去る十二月十三日より廿一日迄、執行せられぬ、心掛よき輩は意外の高點を得て、休暇に父母を喜ばしめ、怠惰者は天罰致方なく、頭を抱へて呻吟するのみ、されど、前者以て驕るべからず、後者以て失意すべからず、吾曹の目的は決して試験にあらずして、その試験以外に於て、顯るべき實力にあり、されども影の形に添ふ如く、

◎始業式　明治三十五年二月八日例により第三學期開校の典を講堂に於て行はる、午前九時第一號報にて各自教室に入り、第二號報にて生徒監の相圖に依り第五年級より順次講堂に入場次で職員臨場、一同敬禮をなし、終りて廣田校長代理始業の辭を述べられ猶左の件々に就き懇ある訓示あり、

- 一、拜賀式に出席者少きに付き以後の注意方、
- 一、學年試験評点に關する件、
- 一、時間割改正の件、
- 一、劍柔両道に出席者減少に付獎勵方、
- 一、成績表受取書差出方、
- 一、校長施術後の状況、
- 一、兎狩をす件、
- 一、長距離競争をす件、
- 十時半式を終る。

◎田部市太郎氏の死去　嘗て本校五年級に在學せられし同氏は、宿年の腦疾治するに由あく、

實力は又試験に上りて表彰せらるべし、試験々々、中々むつかしき魔あるか。

◎新年拜賀式　鳥聲啞々曉夢忽然として醒むれば、坤軸一轉明治三十五年の新天地は來りて、昨日荒寒の天は變じて雍熙の象をあし、昨日蕭條の地は化して麗朝の春である、恭しく惟るに、本日は我叡聖文武ある天皇陛下には、正殿に親臨し玉ひ、邦家の安寧寶祚の無窮を天地四方の神祇に禱らせられ、而して四千餘万の蒼生をして、惠雲仁霧の恩澤に浴するを得しめ給ふあり、嗚呼聖恩涯あし。我校例により新年拜賀式を講堂に舉ぐ、午前九時三十分職員生徒一同講堂に參集し、第一君が世を三唱す、終りて校長謹で御影開扉、一同最敬禮、此時校長は一同に代りて新年の賀辞を奏せらる、再び君が世を三唱し、茲に式は終りて一同退場す。

因に記す、本校卒業生、三浦碌郎、金田政四郎、柴田實の三君は本日の拜賀式に參列せられたり。

醫藥も定命にや敵し難かりけん、去る一月溘然として魚屋町の邸に於て長逝せられぬ、嗚吁悲しいかあ校内の秀才として嶄然頭角を現はし、「儉を尚ぶ説」を草して吾人を戒め、又本部の理事として本誌の爲に盡されたる君も、春秋尚富める有爲の才を、空しく一塊の土饅頭化し、吾人に先だつて黄泉の客となる、傍髪鬚として眼前に彷徨へど、今や幽明境を異にして君すでにあし、あゝ悲しいかあ、こゝに恭しく哀悼の意を表す。

◎凍死軍人義捐金　等しく邦家の爲とは云ひ乍ら、戰場に屍を曝すと、平和時代に災禍のために死を致すとは、豈大ある差違からずや、かの青森縣の歩兵第五聯隊が雪中行軍の遭難の如き、酸鼻の極と謂つべし屍を馬革に包むは武士の習ひあれど、天然の敵と戦うて一朝の災に斃れたる兵士こそ、いと惻隱の情を起るある、吾人同胞この慘事を坐視するに忍びず、相議して各生徒一錢づゝを醵金しこれに諸先生の義捐せられたる幾何を合せ、其筋の手を經て

遭難者弔慰金として義捐せり、金や少し、情やあつし、以て地下の諸靈に告げんか。

◎井伊伯 生死の海に漂ふ身は、無常は覺悟の上あれど、昨日は親しき生母に分れ、未だ悲哀の涙もかわかぬに、早や、我身も其の跡を慕はれし井伊伯こそは悼はしけれ、一月十七日午前、城山に八つの鐘の響く頃、伯の遺髪彦根の驛に着きたれば、本校職員生徒一同は停車場に迎へ、其れより式後に列し清涼寺に到りぬ、清涼寺は佐和山の麓、綠樹鬱蒼たる間に建てられて、井伊家累代の埋葬場たり、やがて伯の靈院中にをさまりしかば、我等一同は境内に入りて靈前に参拜す、名香馥郁、幽烟朦朧、綠樹爲めに色を失ひ、大洞江上爲めに聞きを覚えたり、伯の畧歴、

伯諱は直憲、舊彦根藩主左近衛權中將兼掃部頭直弼公の第二子にして恕堂と號す、嘉永元年四月二十一日江戸に生れ、父の後を繼ぐや、左近衛權少將兼掃部に任せられ、從四位下に叙せらる、文久二年四

を遣され、物を賜ふ、越えて十七日世田谷豪徳寺の塋に葬る、享年五十有五、伯の人と爲り清廉謙讓、忠孝大節あり、又能く人を愛し公益を圖る、本校の如きも實に伯の助力に因りて創立せられしより、吾人日々本校に學ぶ者伯が恩澤を忘れて可あらんや
◎校長の宿痾快癒 痘疾を患ひ給ふこと二十余年、矢竹と思す御心も病の魔神に遮られて、心からずも今日迄不自由を忍びませし校長の君も、「もし此身が健在あらば」と常に仰せらる切あき思の積りつもりて、いよ／＼暫時の違をかみに請はれ、去んぬる年の十月廿二日に上京し給ひ、名だるくすしの數も多く設も備はれりてふ赤十字社病院へ入院し給ひぬ。
兼てより重き病とさくからに、手術もさること思はれて、たらちね慕ふうあるあらねど、吾等四百の同胞は只管に師の君の幸多きを祈りつ、一日も早くすこやかある笑顔に接せんことを願ひつゝありしに、恵みの神も、吾等が切ある祈をあはれと感應ましま

してか、將た又師の君の好運にや、百日もたゞぬ一月二十四日といふに、いとまめやかあるすこやかある温顔は、うれしくも吾等にはゑゑませ給ひけるこそ、喜びのきはみありけれ。
事繁き人の世のつらき悩みの一は、げに病てふくせものありけるよ、このくせものに呪はれては二つあき命も落すためしさへあるに、校長の君には、後の経過も障りあく、安穩に快癒せさせ給ひしは、うれしこもうれしうこむ、また、こたびのこの思し立ても落すためしさへあるに、校長の君には、後の吾等を導かせ給はむことこの欠けあむをうれはしみ給ふよすがありと、第二の親とあがめまつれる師の君のみめぐみは、いかにふかくありがたきものあるよ、こゝにこの事を報するにあたり、さすがにうれし涙にさしぐまれてあむ。

◎雪戦 紛々たる飛雪大地に積みて満目皚然凜々たる寒風梢を鳴らして四顧凄條たり、此時に當り勇氣滿々たる我校の健兒豈に靜坐、爐火を友とするに忍びんや、時は維れ、壬寅の春二月、校友四百名、

月更に權中將に進み、從四位上に叙せらる、其後元治年間に至り、長藩兵を起しゝかば、伯師を率ゐ之れを征して大に功あり、明治元年正月三日、大津に屯せしが、十月京師に入り内裏を護衛す、同二年二月 主上東幸の際、詔を奉じ先驅して兵を東海北陸両道に出す、朝廷功を賞し二万石を賜ふ、維新の後更に藩知事に任せられ華族に列す、同じく四年知事を罷め、歐米諸國を漫遊して歸る、十七年七月、伯爵を賜ひ、明年更に勳三等に叙せられ、旭日中綬章を賜はる、二十年八月、壹万五千圓を献じ海防費を助く、同じく九月特に從三位に叙せられ金製黃綬褒章を賜ふ、廿三年選ばれて貴族院議員となり二十六年六月正三位に進む、二十七年征清の役起るや、又金貳萬圓を獻じて軍資を助く、三十年六月特に勳二等に叙せられ、旭日重光章を賜ふ、三十二年六月更に從二位に進みしが、三十五年一月病に罹り、危篤の赴天聽に達するや、特に正二位勳一等に叙せられ、瑞寶章を賜はりしが、是日遂に薨す、於是敕使

驟然起つて吹雪を冒し、金龜城下に、般々風を起し乾坤を捲かんとす、また近來の快事あらずや四百の健兒分れて二とあり一は城山を守り、他は之を陥れんとす、已にして攻撃軍は中山道より切通峠を越え大舉して之れに迫まり、防禦軍は、城を固守して敢て降らす、両軍の先鋒は已に招魂社前に雪丸を飛ばし、互にしのぎを削りて、博撃亂鬪す、噫々修羅場は、しあく名譽ある死を遂げし國家の干城を祀れる招魂社前に開かれぬ、知らず、壯魂來つて慰むあるか、一丸飛んで松梢を撲ち、雪片四邊に散亂す、二丸飛んで城惶に落ち、水面紛碎化して花と散る、かくて防禦軍はこゝを先途と防き戦ひ、あせりにあせる攻撃軍に入り亂れ、立ち分れ、變幻出沒鬼神の如く、立ちはたらきけるが激戦數十分の後何とかしけん一時にさつと本城の方へ引いて去る、攻撃軍機に乗り長馳本城に迫らんとし、先づ搦手の橋を前にして陣を布き、更に隊を分ちて北方の間道を経て、

敵の背後に出て、その虛を突き本隊と時を同うして敵を挾撃せんとす。防禦軍早くも之を悟り、且つ敵や本隊の擊退すべからざるを知りけん、主力を間道にあつめ、逆襲を企つ、間道より攻め入りたる軍は甚だしく疲勞し居たりしかば何條此の強勢ある敵に會うて堪ふべき、激戦數合の後、徐ろに退却し初めたり、この時こそ、實にかの揚手に於ては奮戦力鬪の眞最中にてありしみあれ。

苦戦の後漸く破るを得て喊聲高く橋を渡りたる攻撃隊は直ちに敵に追せんと早やるに、防禦軍は急き山に登り三方懸崖の險によりて敵を待つ、攻撃軍は徐々之れに迫りて敢て近かず、一は必死の力を以て防がんとし、一は智謀を以て陥れんとす、松聲颶々飛雪愈々加はる時、雪丸漸く飛んで空に舞ひ、殘壘をかすめて、梢樹を拂ふ分一分秒一秒、戰は正にたけあはあらんとす、たま／＼囁嘆たる喇叭の聲は休戦を報じぬ叫喚の天地は再び平和の象を復せり。敵

となり味方と分れ居たる幾多の健兒よ今や互に嬉々として本校に向ふ、時に城山の鳴鐘點四。（完）

◎全校大茶話會

主意、夫れ日々五時間の課業之れ單に學藝を收得する者あり之を以て未だ教育の目的を達せしと云ふ能はざるあり、抑學校教育の目的は一面には技藝を練磨すると共に他面には一校師弟よく一致團結し和氣藹々の間斯の所謂家族制度てふ者を完成し以て不知の間に社會公共的感念を養成せしむるにあり、即茲に此が收得の手段を講ずる必要生ずるあり、此目的を以て學校に於ても師弟混食等の手段も採られ寄宿舎に於ても月一回の茶話會もあれど之れたゞ夫れ窓下幾百の雛兒、師とあく弟とあく各々親しく膝を交へて相會し互に胸襟を開きて快を呼び平和を

茲に於て余等は之が唯一の手段として全校大茶話會を選ふ者あり、夫れ窓下幾百の雛兒、師とあく弟とあく各々親しく膝を交へて相會し互に胸襟を開きて快を呼び平和を

泊ある此講堂も今日は何とあく景氣帶びたり、やがて午后六時といふに五年級生村上善正氏の開會の辭を以て此盛會は始りぬ、茶話會の模様、場所は例に依て寄宿舎講堂、常に澹

泊ある此講堂も今日は何とあく景氣帶びたり、やがて五年藤田氏の滑稽談、前者は剛に後者は柔に人を

して腹をよらす、次に平瀬先生の特意の運動談例を引証して殊に劍柔両道の國務上の必要を宣べられ延いて當代青年の弱風を叱せらる言最も適切、次に新井先生「諷刺」の話し、其起元變遷をのべられ以て現時の弊風に及ばる、言時に諧謔を交へて哂々落々口角泡を飛ばす、山本氏の除草談、軍人的にして最も勇壯、徳永氏の旅行談例の特意の一一句調殆ど笑はずんばある能はず時將に酣、衆色懽然、笑聲益々高き頃茲に又各級餘興は始まりぬ、

筆者再び曰く、此會あるに先立ち、五年級舍生諸君の尽力斡旋せられし所決して尠しこせず、余は諸氏に大に表謝すと共に望むらくは今後於てもせめて一學期に一回此種の催しありたき者あり、あまり漫漫に過ぎては蓋し當初の目的を失ふ恐れあるを以てあり、

崇廣會告

※※※※※※※※※※※※※※

嗚呼壯絶快絶、和氣茲に於て極といふべきあり、此瞬間の平和……正に不平もかかるべく希望もかかるべく……宛然一個の小樂天地：情の極る所誰が得て之を記すべけむや、

あゝ時は無情にも進みぬ、余輩は此樂天地を破りて遂に閉會をのぶるより他あきに至れるあり、茲に於て下村君は登壇、閉會の辭をのべられぬ、即一同起立君ヶ代を三唱し終りて茶話會萬歳を唱へて散會しぬ、十一時半とも覺し、

◎投稿規則

- 1、投稿ハ學術ノ範圍ニ於テシ決シテ政治的時事論ニ涉ル可カラズ
- 1、投稿ハ本會所定ノ用紙ニ楷書ニテ認メ平假名ヲ用フベシ
- 1、投稿ニハ各自句讀ヲ施スベシサレド圈点ハ一切施スコトヲ禁ズ
- 1、投稿等其ノ篇ヲ異ニスル毎ニ其ノ用紙ヲ改メ題ノ下ニ級組及ビ

姓名ヲ明記スベシ

- 1、投稿ハ其ノ長短ヲ問ハズ全篇完備セルモノタル可シ
- 1、投稿ハ其掲否ニ關ラズスペテ之ヲ反戻セズ
- 1、投稿ノ締切期限ハ其都度之ヲ定メテ一般ニ通知スルモノトス

彦根町岸橋十三町
學友會報第十五號
◎寄贈雜誌

山口高等學校校友會
尚志會雜誌第四十八號
學友會雜誌第六號
梧蔭塾報第六號
京華中學校校友會誌

島根第一中學校學友會
京都第二中學校學友會
梧蔭塾
京華中學校校友會

滋賀縣立第一中學校

崇廣會

會員

柴田善次

明治廿七年五月卅日內務省許可
明治三十五年三月廿三日印刷
明治三十五年三月廿五日發行
（非賣品）
滋賀縣犬上郡彦根町大字中組東
第二十三番屋敷
編輯兼發行人 木川雅太郎
印 刷 人 安田 豊八
岐阜市篠土居町四十五番戶
刷 所 安田印刷工場
岐阜市篠土居町四十四番戶
第一中學校 崇廣會

